# BOOK REVIEW

**いのうえ　ひさしさん**

「こまつ座」の座付き作者。
上智大卒。「吉里吉里人」
などの小説も多数。
コメ市場解放反対などの立
場からの発言も多い。
山形県出身。50歳。

## ユーモラスで説得力のある農業論

# 「どうしてもコメの話」

**井上　ひさし　著**

平成コメ騒動が連日マスコミを賑わせるさなかの三月下旬、民法で〝朝まで生テレビ〟の『激論・大丈夫か？日本のコメ』が放映された。午前一時半から五時まで、例の田原総一朗司会による討論番組である。そう若くない身に徹夜はこたえるが、ブラウン管の前で朝を迎えた。

総体の印象は、肝心の食糧庁のお偉方が、多忙を理由に出演しなかったため、一同やや〝標的〟を見失った感があったこと。それとやはりこの種のショー化された百家争鳴的喧騒の中で、物事の本質を考えることはムリだろうという点だった。発言は常に司会者や横合いから声高に割り込む〝論客〟たちによって寸断され、かなり大事な論点が提示されても、ほとんど論旨を完結させることはできなかった。

当初、出演を予定されていた作家の井上ひさしさんが、この日のテーブルについていなかったのも、あるいはこうした成り行きを予想したせいかもしれない。でも私は、ちょっぴり残念だった。

前置きが長くなったが、本稿の目的は、その井上ひさしさんの近著『どうしてもコメの話』の紹介にある。本書の発行日は、昨年十二月十四日のウルグァイ・ラウンド合意発表のわずか十数日前。ブックカバーには「大凶作・緊急輸入で緊迫するコメ情勢下の緊急出版！」と謳われているが、本の中身はもちろん、急転直下の決着を予想していない。

私が本書を手にしたのは、あの〝深夜の発表〟の数日後。井上さんが本書の中で切々と訴えた自由化反対の第一の堰は、すでに破られていた。だが、それだからこそ、さらに熟読再考すべきものが本書にはびっしりつまっている。

井上さんはウイットに富む愉快な小説や戯曲で知られるが、私は二、三の作品に触れているだけで、あまり忠実な読者とはいえなかった。しかし近年、コメ自由化反対の立場で精力的に論陣を張る井上さんには、強い関心を持っていたから、書店の本棚でこの本に手を伸ばしたのである。

本書は平成四年に発刊され昨年末までに十一刷を重ねた『コメの話』に続くもので、その後に井上さんが新聞、週刊誌、月刊誌に発表した評論、コラムや講演録など長短三十編を収めている。

井上さんは、まえがきで、それらの文章を貫くコンセプトについて「日本の地形や気象が水田稲作に嘘みたいによく向いているからそれを捨て去る事はないよということ、地域資源を有効に活用することがこれからの日本の、というより世界の課題ではないかしらということ、そして水田や田園で生きる人びとにも所得が保障されてしかるべきであると

いうこと、この三つがこの論集の主調音になっている！」と述べたうえ、「私はこのことを死ぬまで呟きつづけるだろう」とも書いている。

しかし、本書を貫くものは〝呟き〟などではない。理不尽なガットの傲慢を怒り、日本の国土と農業、食料自給の大切さを説き、静かだが情熱的に、キチンとしたデータに基づいて論じている。無機質の数字の羅列を避け、身近な事柄に〝翻訳〟してユーモラスに読ませる文章は、声高などんな議論よりもわかりやすく、一つひとつ胸に落ちる説得力を持つ。

論じられている事柄の多くは、これまでも多くの人が指摘してきた。しかしそれらに、いきいきと命を吹き込み、訴求力を与えているのは、作家の力量とともに、井上さんの思いの深さであろう。これからさらに山あり谷ありの日本農業の援軍として、井上さんの第二、第三の『コメの話』を待ちたい。

巻末に著者のコメントをつけた四十二ページにわたる参考資料集が付されている。

（一九九三年十一月発行、新潮文庫、二五二ページ、四四〇円）

**評者**

**「広報ほくれん」編集長**

**能條伸樹**

## 新聞
## スクラップ・ダイジェスト
### Part 3

＜1994. 3. 14 北海道新聞＞

「総理府の食生活世論調査」**コメ自給派77%**「食料の将来に不安7割超す」

☆13日付で総理府が発表した「食生活・農村の役割に関する世論調査」では、国民の4人に3人がコメなどの基本食料は、外国産より高くても国内生産を求める。

★将来の食糧事情に「不安がある」とした人は71.7%で前回（90年）調査を約8%上回った。理由として「異常気象や災害による内外の不作」を挙げた人が前回調査の44.1%から66.3%と急上昇した。

☆食料の安定確保策としては「できるだけ国内で生産する」が77.4%。

★コメについては**「コメ中心の日本型食生活がよい」**97.6%、「主食にふさわしい」94.1%と評価している反面「もっと食べるほうがよい」は、55.9%と前回の68%より急減。コメ不足で主食を多様化せざるを得ない国民の反応か。

＜1994. 3. 18 北海道新聞 夕刊＞

夕やけ小やけ▷▷ハナキン通信**「平成コメ騒動」**

☆日本滞在が4年になるカナダの女性（26）は疑問を口にする。「カナダ人はカナダ小麦を求めて並んだりしない。タイ米もカルフォルニア米も食べたけどオイシイ。日本人は食べもしないで、高い日本米を買おうとする、なぜ？」

★「時間が余っている人達が並んでいるんだ。彼らだって日本米がなくなったら、他のコメを食べるんだ」ただ、それだけでは、この熱狂はうまく伝えられない。

「日本人がコメに敏感なのは、**コメが日本の歴史の一翼**を担ってきたからだ。日本人だから日本米にこだわる。いわば、コメの尊皇攘夷運動の熱狂なんだ」

☆彼女は首をかしげ、再び尋ねた。「そんなにコメが大切なら、どうして減反したの、なぜ農家が減っていくの？」

★僕は、……口ごもった。

＜1994. 4. 13 日本農業新聞＞

**「農業白書」食料自給を事実上放棄**（新政策の具体化全面）米不足、輸入に反省なし

☆凶作、ウ・ラウンド合意、高齢化などで「農業・農村は内外を通じてかってない、困難に直面している」「小規模農家の経営外部化などによる大規模経営の育成」等新政策具体化を急ぐことを提言。

★コメの大量輸入による国際的影響を認めながらも、「輸入や備蓄を適切に組み合わせた食料供給を目指す」とし、食料自給を事実上放棄した白書となった。

**◎「白書」に対する各紙の論者意見タイトル**

☆北海道新聞 4. 13「不明解な分析・情勢判断」 七戸長生・酪農学園大教授

★朝日新聞 4. 18 「米作の将来像描けず・制度矛盾の解消が必要」 脇坂紀行・東京＝経済部

☆日本農業新聞 4. 13 「食料安定供給に責任を・元気だせ農水省」 山下恕一・農民作家

＜1994. 4. 16 北海道新聞＞

「世界貿易機関」へ一歩 ―マラケシュ会合が閉幕―ウ・ラウンド正式に終了

＝WTO協定の批准「国会審議」難航も＝**農水省・国内農業対策検討を本格化**

★ウ・ラウンド合意によりコメの部分開放のほか、乳製品など輸入制限品目の関税化などに踏み切るが、批准をめぐる国会審議は難航も予想される。

☆実際には、食管法や関税定率法など国会関係法令の改正が必要で、政府は秋の臨時国会に、協定とともに改正案を提出する。協定の**発効日は来年1月1日が目標**